秋田市民の生活環境における意識構造について

秋田大学　正会員　清水　浩志郎
学生員　京野　秀朗
学生員　○竹谷　寛

1　はじめに

従来の都市計画は、主にハード的な面から立てられており、ともすれば人間不在の計画になりがちであった。しかし、近年とみに起こってきた環境破壊、住民運動等の社会問題は、この方法の限界を示しているものだと言えよう。特に我々が生活する上での都市環境問題には、単に諸施設を増やすという面よりも、むしろ利用のしやすさ、満足度という使う方の立場から見た、ソフト的なアプローチが必要だと思われる。真に人間活動の場としての都市形態はいかなるべきか。地方都市においては、この点が特に重要である。以上の問題認識に基づき、県都都市である秋田市において、生活環境についてアンケート調査を実施した。

2　アンケート調査について

アンケート調査には、実態調査と意識調査とがあるが、我々の用いたのは、人間の主観的感覚をはかる意識調査であり、生活環境をはかる項目40に、全体としての項目を加え、それらに関して満足度を5段階で色別させ、満足、普通、不満足の3段階で解析した。サンプルを集めるに当たり、秋田市全体を58ブロックに分け、各々、町丁目別に無作為抽出をし、各ブロックの1％を回収した。実際の使用枚数は2548である。

3　定性分析について

解析しやすくするため、小ブロックを地域別に類似した8つの地区に分け、市全体と合わせて9つとし、単純集計を行なった。満足度の割合が大きい項目は、中心地区で上水道，買物の便利さ等、都市機能の面をあげており、周辺郊外地区では、日当り、風通し等の自然環境をあげている。不満度においては、前の逆の事が言えるが各地区とも共通に多かったのが、子供の遊び場所の豊富さ、安全さに対する不満であった。全般的に、満足度が高い項目に比して、不満度の高い項目はきわめて多い。全体として不満というのは少ない。つまり、各々には種々な不満があっても、生活環境全体としては満足と回答している。

4　定量分析について

数量化理論第Ⅱ類を用い、全体としての満足、不満足に各項目がどの程度寄与しているかを、市全体と各地区ごとに調べた。市全体としてRangeの大きいものは、プライバシーの保持、風通し、家のたてこみ具合，上下水道，公民館等地方中規模都市の魅力に直接つながる要素が含まれていた。地区別には、中心地区で、風通し，静けさ等の自然環境と、買物の便利さ，公民館，プライバシー等の都市設備面で高く、都市周辺では、上下水道道路の舗装、プライバシー等の都市要素が高い。郊外部では、医療施設が非常に高く、運動施設、買物店等が、それについでいる。定量分析ではさらに、主成分分析を行ない、各地区の意識構造の位置づけを明確にした。

5　おわりに

秋田市内でも、各地区に分けることによって、それぞれ環境に関する意識構造の違いが見られた。これは、各々の施設が、交通ネットワークの不備や地域的偏在等によって市民の利用形態が均等になされていない事を意味する。したがって今後の環境整備にあたっては、その土地利用形態とも合わせて検討し、諸施設を分散するなど、自然環境と都市施設との調和ある整備が必要と思われる。